

# 変わる中之島、 ロイヤルホテルの 生きる道とは

ホテル王と呼ばれたコンラッド・ヒルトンが「ホテルは一にも二にも立地」という言葉を残したほど、ホテルにとって立地は重要です。リーガロイヤルホテルが建つ中之島は大阪の中心地ではありますが、鉄道は通っておらず、交通至便とは言い難い地域。そのハンディを克服しようと、さまざまな工夫も重ねてきました。それが、この10月に京阪電車中之島線が開通する運びとなり、念願の鉄道が中之島を通ることになりました。中之島にとっても当ホテルにとってもいまだかつてない革命的な変化であり、大きな期待を持っています。

期待の一つは、京阪沿線の企業や住民の方々や当ホテルの距離がぐっと近くなり、市場が広がること。そしてもう一つが、中之島と京都が約1時間で結ばれることによる相乗効果です。大阪に宿泊し、祇園や清水寺、伏見稲荷といった京都の観光地を通る京阪電車で京都観光へ—このコラボレーションが実現すれば、京都と大阪という雰囲気の違うまちを一度に体験でき、お客さまには喜んでいただけますし、春や秋の京都ではホテルが取れないという長年の課題の解決にも役立ちます。そこで、「二都物語」という京都と大阪の観光をセットにした商品を開発し、旅行会社に対してPR活動を始めました。そのほかにも、今回の鉄道の開業を新たなビジネスチャンスととらえ、ホテルの各部門が一丸となって今後の戦略を検討しています。京阪電鉄とも合同で会議を立ち上げ、お互いにメリットのある協力関係を模索しています。京都や大阪の関係各所ともうまく協力していきたいですね。

倉庫街だった中之島にホテルを開業して70年あまり。ほたるまちなちびらき、続々と行われるビルの建て替え、京阪電車中之島線の開業、さらには建設されたマンションに人々が住み始め、“中之島はやっと変わってきた、まちができる兆しが見えてきた”と感じます。放



川越 一 氏

Hajime Kawagoshi

ロイヤルホテル社長

送局や美術館など、晴れやかで洗練された雰囲気を持つ企業や施設が集まり、新しい人の流れが生まれれば、中之島はこれまでとは比べ物にならないほど活性化するでしょう。華やかさが欠かせないホテルにとっても非常に喜ばしいことです。そして、中之島でもうひとつ感じるのは“親水性の兆し”です。船着場が整備され、クルージング船の運航も計画されているほたるまち。堂島川に向かって開かれたまちからは大阪府や大阪市をはじめ、関係者の水に対する考え方がやっと統一されてきたことがうかがえます。水都・大阪をアピールできる環境が整ってきました。ほかのホテルや他業種の企業とも協力し、大阪・関西への集客を増やす仕掛けを考える時が来ていると思います。

ホテルの生きる道とは、その地域における役割をきちんと果たすことです。1泊100万円の部屋をもつホテルも1泊5,000円のホテルも地域での役割が担えているからこそ生き残っているのです。国際会議の際に国賓級のVIPに宿泊していただいてもビジネスとしては厳しい場合もあります。しかし、その役割を他のホテルに譲ろうなどとは全く考えていません。ビジネスだけを見ていたのでは地域での役割は果たせないからです。これまで培ったノウハウにさらに磨きをかけ、役割を担い続けていく自信が我々にはあります。そうして自らの役割を果たしながら、地域に対して言うべきことは言い、時には互いにリスクを分け合って協力し、今後続いて行く中之島のまちづくりにも地域をあげて取り組んでいきたいと考えています。

談